

風姿花伝第四、神儀云 申楽神代の初まり

一、申楽神代かみよの初まりはじと云いふ
は、天照大神、天の岩戸に
籠こもり給たまひし時、天下常闇とこやみ
に成りしに、月神の御子、
島根見尊はじを初はじめたてまつり
て、神達、天あまの香久山あつに集
まり、大神の御心とを収とらむ

〔口訳〕 申楽の神代に於ける最初は、天照大神が天の岩戸に御籠り遊ばした時に、天下が常闇とこやみになったので、月神の御子の島根見尊をはじめて諸神達が、天の香久山に集られ、天照大神の御機嫌を直さうといふので、神楽を奏し、細男せいなうを御はじめになった。その中にも、天の鉦女命が進み出られ、榊の枝に幣しでを付けて、歌をうたひ、ほどろくと足踏をせられ、神懸かんがりの状態で歌舞せられた。その声が、かすかに聞えたので、大神が岩戸を少し御ひらきになられた。すると、天下国土が又明るくなつた。

とて、神楽奏し、細男（才男）

をはじめ給ふ。中にも、天

の鈿女うずめの尊、すゝみ出いでて、

榊さかきの枝に幣しでを附つけて、声を拳あ

げ、ほどろ職踏しよくふみ轟とどろかし、

神懸かんがかり為すと、歌うたい舞奏かなで

給たまふ。その御声、窃ひそかに聞きこ

えければ、大神岩戸すこを少し

開ひらきたまふ。国土又明白た

り。神達ぎよゆうの御遊面しろかり

けり。其時の御あそび、申さる

楽がくの初はじめと云ふ。委くはしくは口伝に

あるべし。

た。そして神達の御遊がまことに面白
かつた。その時の御歌舞が、申楽の始
めだといふことである。詳細なことは
口伝にあるであらう。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『世阿弥十六部集評釈 上巻』能勢朝次著